



言水
追福

海音集

天
方設撰

震



5
1812





追悼



老乃名を以果ふ孫を女反古策

扇凡子

そま白ひ快子のうりておとそふ

山鶴子

名子そまゆらおぬまをる水のた

冠雪子

気のつらぬふたに下りてはき物屋

山秋堂

今宵子

遊とのを狂言綺語を秋のふ

空春主人

如高子

そま老に果ハるるりりり詠古のふ

波星子

漏刻にゆるるおれやふれた

如夕子

芳は不洛中抄んで瑞の日
うと切をうらや木葉の友友と事て
言のえあむけききと一む

短冊にうらや木葉の友友と事て
鳴蛙井 山夕

六一章

既子 諸候大君乃玉能を下し編ハ
とを子事つた付りしに追う今又東武
よりか東の於院傳り巻の束あつて
天ノ部 糸あつてこれとてに写しあつて
錦上り花を伝のかつて
あつて

海下一

卯の春東武より到来これを地乃
巻の如く評りしとあつて

先俳江部子事し付何めて編系
とてあつて小冊を新道とあつて

五の冊より何といふ船を五十年
沾徳

五十より何といふ船を五十年
沾洲

凡や中る八百韻をいふ産さう
青嶽

佛多村に浮世をすき固
江鶴寺 松又



いねより九日... 到...
これを心て多よりつゝぬ

去りて人子一雨梅もどる

桑之畔

貞佐

袖を飾るも花の果乃呼く事

和凡

神子一拂子の下に密林味

藏六

石子筆をたときく日を時ふ

山夕畔

仙水

そと西にるを糸呼く事

心科

茸持人ハきけり寺乃山

記丸

(徳下二)

指を折る羊ハ泉とてや
言水ひり路山川亭
長...

秋こゝハ百顔も皆故人

心鶴

顧ふそりり友のうら枯

方設

煤多層葉層の月に浸されて

軽人

彩霞の果子と昇て出る

芥生

糊をハきけりやうなる雨あつん

文舎

雲のはめいすへて已乃時

霍里

船乗の言をきく舎下も家

此麻

不柏子亦振る大根乃賽

荅賀

岩火まで育のるるは糖足ん

勢夫

厚くもてあす武士のめ屋

翁来

鉄心の尼店之附弦まかりし

霍洲

田面の二日一雲更そり浮

批筆

その夜は舌よさるるあ月を以

拾舎

たかつうふくと香紙拾らん

一路

きをやめの庚申なりふを待

氷心

幽下三

さうれえ落る様でも形一

心鶴

忘すをなつけくこいハ志の原

方設

蓋 ^{ケタレ} 天より神づくと金

輕人

舞つけいこく極き蘇余

芥生

あれ結誼ふ中子うれ飯

文舎

む川いこい鏡を案る牡丹持

霍里

那子も念あむのめ神

此麻

張費の極もありの杖草履

荅賀

雪の籠を鏡のうらなく立

勢夫

園のまはりの邸退くと神の

倉来

孫、一葉乃う終、さげま

霍例

し馬と、合と、すう、う、る、音

一路

奇跡麻（と、登て、喰り、り

恥舎

めつ、や、ハ、捨、ふ、の、る、り、急、ち、折

氷正

娘と、り、す、し、と、む、す、す、り、子、孫

芥生

と、入、の、お、由、計、命、ハ、雲、を、荒

心盾

お、工、利、め、つ、生、は、雨、乞

輕人

鏡、卒、ハ、轉、補、と、の、り、る、泊、り、る

霍例

海下四

笑、あ、ら、家、を、本、ッ、て、伽、後

倉来

手、か、つ、手、、、う、浦、で、志、め、て

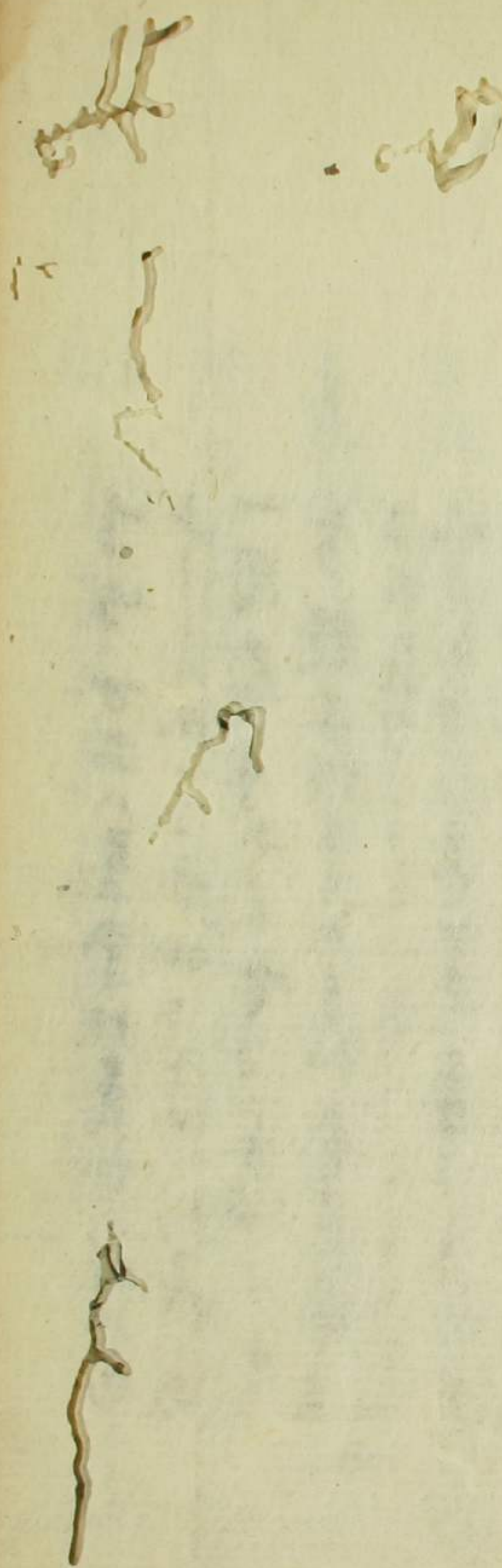
花の軸

恥舎

う、う、終、を、志、あ、ら、る

方設

紙、布、子、を、し、る、る



其

鳴呼世田ハ夏中此夏言集ハの
一周忌多クもみぢり多クも
方設子のすくわられもまじは
子古たかりといふ
心りあて今やサキま登子
所やりしておとすんをらん
り木ゆひ中くせし

根子ゆき去来も多命 秋枯枝

面 氣のひとのこころや 種 茄子 霍 測

休下五

其

一羊時庵主人師忌をたもてこ
其角十七回忌哉吊ふ撰系を
飯洗ふ水の濁りや下河原となくの
古亭一 張りしりとも 講上は
おぬし 定めふ事おま
これ一と也其角二京と一水 浴二の
集加ら招張あき 新川京町橋や
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
いしとに其信 張出外

其

飯流ふ水乃溜りや下河原 其角

戸始あけりしふきくぬ風 集加

旅子あれハ独あきさし身由て 赤黒

浅黄きいつく惟子乃皴 泥豆

梨子の真さをあかりや言は月 轍士

ハ中をすまふも地をこりり 鞆石

平切の降とも行ふ山の秋 金毛

おひぬほふ茶巾さうり 士

(四十六)

下戸しといわれてらふも口惜き 之

傾体後さす母も孝あり 角

丹心小畧

予をさき角工の法をわらさぬのゆりあり

て其時羊旅ハ赤城小をさりて忘れ

衆鳥同林ふ旅ハ一又乃一會も精亭

りて儼と一りのありに

旅さや二冬刻て京始水 其角

旅の千冬の水ハ離るん 金毛

其

信徳

掃如喻りてそぬ宗耕て

信徳

けりそりてを降ぬる足る

雨伯

そあり新朔日凡俗の形並ふ

長九

影う海りし九月の朝戸出

集加

推のふれ盆にころつてきりて

轍士

いつ秋にけりし外内人の膝

泥足

平心六景

この巻は晋子秋の句に菊をけてやう

り部より古きありしう白紙先師信徳

巻下七

感くけりしそ中への凡俗新秀並ふ

是未始なりけりし海邊を光陰を命く

去るまゝの故人と成と知るものを教

雨松長九家而也

一嵐雪のふりし十七回忌始りし

一と也の信海に入てあゝしけりし

晴るおのる海もや並そけ

気雪

掃ぬる傘を八指も降りて

金毛

左明乃山にけりし口反りて

轍士

泥より滑るはうら枯の額

丹野

この巻は凡そ中ありふあ中一して一巻致
みつゝ中てさうしは如珠は各古記さ
と辨しるし 陌上乃ききふあし一と出
ありけ丹野は中りたそ中とて舞也
如き人世人知れし西に記流ハ芭蕉門人
下し天志も他は是れなり 或時中元
如しつ物中三は丹の如これにて神像ハ
やしゝ如珠は是ハ神像なりと云ふ
海下八

一うたはるし神像一となすはあゝ如及
ありやこをし標本なるは 彫れ如るは
中三にかりりし田ともしつはり是もは
形もあもあし 既宗祇独此中三子

山凡そこれハ花形も里も家 宗祇

麓ちりりし谷此川波

小田かつは岸のり水音早も

あゝの如も如のは如乃如いし如也
連ふよあもあり又玄仍の七百韻

中三に及より字義意にあり
此類を悉く師傳するに
明く書物なり也此中三乃
見えて中三ハ昔付言く
さなるれハ何故まも
心は人なるを
いふか
を
凡を
龍京

四十九

す
卷の終りとして用
あり宗祇曾相宗長の
栴伽との隆平を希代
の
初刊の表に
り
同書に
さるありて表に

所ありてとて合ありぬ三の表十四内めよ
套ありて表の角より元を宗子友を附
是より柱物三と与隣より是名匠三哲
乃卷なまるともこれとて合多しとて
ホハむりとも所一人と云くともとて合よハ
終か古賢のまをまといとては終賢
多本ふありぬとてけかよも亡師より
隣より一人とて連分の巻とも
成るるととて合多しとて作りとて教ハ

備下十

むりハとてとて合を孫ら事
論とて只白の善悪強のこ味をれ
さし合ハ紙筆の程ありぬとて高近の外
一三座の仲者詞をかくとて又おし
懺悔の會とて合をくりとて纏
とて所めしとてとて合ハ大才のさし合ハ
見のりとて徳あり能白のありぬとて詮と
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
至徳心を教へ

一 祇詣乃凡神時（亦かえりけり）こや
貞徳翁跡時を平懐なる言なき
——て祇まつとくゆめ侍る既久後流
乃 渡ふもま昔までまやなるとん
好まハ方連致を——い中——き祇詣
をいつあるま 伊勢の屋——庭とを
つまよとくしる白子丸の京——らとふ
宗殿す人まろの答よ山岸宗殿乃
相方にが——やけ里とよちとくまふ

（海下十一）

教のうつけいゝに結んんと解——を悟り
たくれやそと強ふしつ時多とこ一
のま満り——まになとや——あ火を
まよとく古方殿ま船りま——て
まよとくつま——まいと長丸のま
るけち早まお福のい——ま凡
そりてこの祇凡ふま凡侍ハ
時——ま合す——能なり——いつま
おまは——時分の凡依をま——

連発の中此祝儀遊よりいふまゝの義
ふたあ〜ゆと也

一頁迄有る事たり乃席〜

あり

秋〜あつがあつるめ〜

家を買まぬ〜

といふを門人云此記と云ふの由〜
中條のそのや〜
病初〜

湯下三

の是け分古と条乃祝儀ありありけ
と〜本分〜
はる斗あり〜
師乃〜
おり〜
元祿のけ〜

何〜ありて〜

た〜山〜

と致〜

猿丸を夫乃弦安をえきききいん乃
祇遊みく他は達し一真なるなりた也

一或時おまつる戯きにかけぬの唱分
をゆるる一として夕平しんのかまよ
と上の句をつらりて下ハ何とさつふやと
いふに早もされハと戸内は唯然坊うの
席子ありて何の者もなき一葉録し
ふりしにけりしと雄の音と戸内は
一花ごよみそ終よあけしより夕平し
修下十四

んのみよごちりしとけうすはきとらきし
まき唱あるとこそ花乃を校柙男将く
笑ひも志つまきし一葉録し唯然も
人のあはれをわハ中治地のきききき
本の下にをぬすの枯葉残きて水さめと
名ハぬししあハぬハとやきき
ありし一葉録し終ねもひとせ終同に
十三
ふけりしとけりしとけりしとけりし
中つとけりしと

一立圃ハ奇絶精純乃他者也生涯の百
姑分爲与文政と云殊書系て六日乃
苜蒲と外野て三冊子制て子川
うゝ筆を海へ送くは予秘蔵也
この中に五戒と云くは戒の撰を
仍け糸の因に字をわし作りぬ
戒の撰は五川の撰ありこれをも
佛の説法を破ることと先有白
くは月花をうむきたる心を清くり

佛下十又

出名に旧諺をあきとくにわ解し又平句も
あふにうへること或は正一句の心も狂や
是この色をとりは及理を教生戒の神也

折とくハ教生戒と大所く立圃

古く分建欵をわとて奉一分致るの位
いふ古記に云くをわとていひつげを
夫もわ分建欵とも古分致ぬすめ
とて中嫌へりこれハ偷盜戒乃罪也
ぬすめれぬふもや罪を犯りて 全

所行乃きよも又つて降るや
おふひやこそぬ 忘能知

試筆

控をやとおもひの世も明ぬれ
又ありするに九を乃春

ある人限元業権と云ふのを
如して良無事やれり

うも言控達ノ味喚う乾を
やうんひも川を空にのり物

(海下十八)

宗易居士物かゝる金と名付
らばいふ少物真つ昔後心持
自中身あるの父金紙神子
して覺る高の珠と龍文乞
亦乃かりりる良無事やれり
中身ありりぬ物や 控うれり
之中塩辛やれぬものあり碎
りり物るうま一首と書れり

ふも建下物うゝ父金紙神龍文
うけりて家ハまゝの書り

うら

千氏
是の南

く志付し 喉のうらさ 涙やめさ
うらハ 喘りし 涙を 控りし

連歌試筆

山多結尾上は 流るる 春の川
言水

日うつん ながさ 見物つ 花の妻

あつる 中に 立ち 光り くる

あやや ありの ともも 心の妻

あさかりも 世の こころ けり 春の妻

佛下十九

誹諧乃部

鷹司前関白房輔云めし

石段を下さ 控りし

花交松

かたつ やさしく のき 小菫系 言水

あき なるし 引幕の 内 御

木さか子の ゆみ 線

鳥やうの 山城へ

浪土の 一急 歩来るの 秘初雪

とろり 歩来るを

雪の解や接ぐも雪も妻妃の肌 言水

結く比お美子能多をこの舟 白童子

船も浮快乃銀杏に凡室をす 雨路活子

東御門跡一如る法清あそ

つりおて故屋面白を月夜外 言水

きけりこ子旅あ 天

秋や秋や雪の渡子や啼 鷗

宗祇乃賛

陽下二十

傘捲て去るぬる村 くられ
雪あきり日枝ハ江の柳あそ

住吉市

ぬえ玉の衣を入や菊よ市女笠

朝鮮人素朝山神よ

校榜の舞家園乃春歌え

園別城を結く

山をと祝きつ 一は君の駒

おは涼を 沙の 入百川

并降りるも世や神乃花結

大井川あり

凡菊のやまを花はるりふも川

千句巻取

何と驟く柳のふれ人か

羊面美人

朝さむや唐歯赤斤十寸か

南都へ引る川も赤

秋好む人子秋あるいつと外

奈ららるる

（下）

句派土産拍に二月の瓜ハ赤

^{ナラサゲ} 号有の老やくりも少赤

了成ちあ

入おも旅僧追ゆる枯神うね

弘仁ちあ

初草も阿ハ家神ふす記

丁巳日星

折もよ祇言ちもりあのか

島赤鞠待てまもまのうすもり

且句ふ庭や一すぬ枇杷の花

父より母やむしに唐姑拜
あ門るや亦より姑情や辞一扣
御書やま代を今のこね札

但 御書文之 師説

一 妻より立られ先中絶ふくも
多あわれくすまきと止ぬ

古麻や公立も喜田姑ひと抗 言水

手向々神紙く山崎踊 方設

舞鳥の七条強く封切て 信安

こねか教くあねん 畧く

海下三

一 苗糸より予う竹白子久うこと申を存不
鏡よりととと宗近好士乃久才と申と
るに用ひたれ他を未見やす然と初人の
案のたあつらぬくおもれん仍師傳
たれと母ああ

一 久才と根元應神天皇乃后此衣の
るより膝のすくくくくくくくくく
縁形と鞆を何くくくくくくくくく
空いさをふもれゆくききこの人故久くく

辰流し 形も方と解し久すも中にて
いっしよの天の影ひ乃枕を懐とふあり
とふやありし久あこと中して月
月との係を古今十八巻子

久この中にてひる里あれた
ひよりをぬくさきのむきや 伊勢

これを伊勢の桂の里に信る狐七巻の
中へ宮姑らせまつる御也一な終て后と
て存子ありしやとてそのくねとありと

(修下九三)

よあり久あこと中よもて月一しき
流分は弁乃おはれ久あ中へ
せしる里と月宮は桂のありは
る中へよをひる里と桂のよをあり
又うさかひ久あこれ中なる川のうらみ舟い
うふちさりてかへ返まつるんとあはる月の
中へ桂川也これを伊勢の宮よりあり
又表撰式より月を久方と云天をえ
ありことと云とありこれの正後よし

昔の如く魚をとりやれ飛を井雅世の
古今抄をとりし抄をとりけし中にも安文子を
一捲言ふも教くしるる事し世子如くしるる事し
なりしにたりしは終くしに事歴の事なり
予て此言つて鳥羽玉といふ根えハ秦
始皇の父莊襄王乃時五尺の鳥出
來りし其の羽乃中に思ふ玉を是故希
代の中へ傳へて鳥羽玉といふなりこれ
より傳ふも是言をとりし事なりし云々此れなり

傳下九四

やうやう古式よりハ取れぬ玉と云々此は
うと玉と云々去れりし事なりしはむと
玉の如くもぬ玉の如くもよめる事なり天に
哥合小むと玉乃すれのゆへにはむと云々
家より事取れぬ事なりやと云々此は取れハ
ぬと玉と云々いふ玉ハ別の物なりと云
負て付色と云々いふ事なり合乃別か
終く未代のある事なりかかりし事なり
此の如くしるる事なり雅世の古と抄より

神樂子持云紫雲と云事一は係りぬ
も凡雅房一粹を述べて元就云
一して事や多くとり得る人も多し
筆のつめて尔事取一傳ふるは
神楽雜録の上を故る事歴をも深
く可考事也

一又無名の多に名をわたり是又
師傳ありて神樂分ちてをさき傳あり
仍くり一さるハもわたり事
他下七頁

引白ハ

いりある事うるに唱事

と云事の存につれあふ子親 宗祇

二持介兼載昌規のたより
いふもさし母累と

ハ二品ハ事りこの事には句あれし初ん乃
うたふい紙と云事あんに記し傳ふぬ

一法藝の中ありて舞楽音曲鞠事
の事をもあはれん或ハ笑ふれ或ハ談ふれ
事にて後世亦名を孫事なりて是と

此の傳節は并ふ處を極ふし款
建分詩蘇句祝禱手紙など万代
そのまゝして是故知く正人を傳者
を知る事ハ此の嗜むハ其流也正由
此人ハ祝禱も正由子笑ハ邪曲の人ハ
祝禱も邪曲子成物も一知一其
及ありとて師の記きし事く物も
宗祇の傳へ子土地をうこりし鬼神
故もと成事しとおもひしそ宗祇ハ常く

同上十六

正由子阿くしてハ不叶く語道人耳
義慣神明も傳統を以てする初と云
ありとたれい入事被るは神と云佛
意亦も納受を物しと云あり

言の葉も散るのみりり奇州水

掄動

湖東四三州稿

文星入夜臺 猿鶴亦悲哀

揮淚讀遺稿 空餘処士梅

和及那山

葉山

投函

名木此卒尔も秋の風怪す
秋のころ万里ハを 波の色
凡骨のかりくく 虫のこ

あま三七

杜之山

